

埋蔵文化財の発掘調査報告書全文データベース「全国遺跡報告総覧」の公開

2015年6月、埋蔵文化財の発掘調査報告書をインターネット上で検索・閲覧できる「全国遺跡報告総覧」を公開しました。2008年度～2012年度、国立情報学研究所の最先端学術情報基盤(CSI)整備事業の委託を受けて、島根大学を中心とした全国の21の国立大学が連携して取り組んだ「全国遺跡資料リポジトリ・プロジェクト」の成果を、奈良文化財研究所が引き継ぎ運用しています。プロジェクトでは委託事業期間中に約14,000冊の報告書を電子化しました。しかし、各大学に電子データが分散していたので、奈文研にて電子データを統合した結果、1回の検索で全国の資料を検索できるようになりました。

公開しているのは、地方公共団体等が発行した埋蔵文化財や遺跡に関する資料です。各資料には、それぞれOCR(光学文字認識)処理を施しているため、任意のキーワードで全文検索できます。検索結果のハイライト機能があり、自分の興味がある資料に容易にたどり着くことが可能です。

今後は、国立情報学研究所が提供しているCiNii Booksや国立国会図書館サーチ等、他システムとのデータ連携によって、貴重な発掘調査の成果を、より円滑に流通させ、埋蔵文化財に関する成果の社会還元をめざしています。

利用者の方々にはたいへん好評で、アクセス件数も増加しています。一度、「全国遺跡報告総覧」にアクセスいただき、調査成果をぜひご活用ください。(研究支援推進部 高田 祐一)



全国遺跡報告総覧 トップページ
(<http://sitereports.nabunken.go.jp>)

専門研修「文化財写真課程」と出張講習会

写真室では、1990年より文化財担当者専門研修「文化財写真課程」を担当しています。当時は、大判・中判フィルム写真を発掘記録写真の標準ととらえて、受講者に一通りの基礎的な知識と技術を習得してもらうことを主眼としていました。

近年ではフィルム写真の環境が事実上崩壊し、発掘写真もデジタル化を進めていく必要に迫られています。本研修課程も様々な検討を経た「デジタル化の標準」をもとに、講習内容を見直して研修を進めています。

研修での講義・実習はすべてデジタル写真の知識・技術を盛り込んだ内容としています。ただ、ディスプレイ上で写真を判定する技術の前に、暗室処理を体験し、手を動かして写真評価を習得します。ディスプレイでの調整に有効であると受講生からは好評なカリキュラムとなっています。

参加する受講生をはじめ、文化財の記録作業を担当するのは、ほとんどが地方公共団体の文化財担当職員で、写真を専門に仕事をしている職員ではありません。限られた環境の中で出来る限り文化財の記録として「良い写真」を残すため、写真室では写真技術の出張講習会もおこなっています。

文化財写真では、高精度な写真を将来世代に向けて長期に保存・活用することが求められ、数年前まではデジタルは不向きであると考えられてきました。しかし、フィルムインフラが崩壊するのにもなって、白黒現像の保存性も低下するという事態を受け、2012年5月に「文化財写真の保存に関するガイドライン」が刊行されました。

今では、ガイドラインにもとづいたデジタル化についての講習会依頼が増加しており、全国的な文化財記録の様変わりが感じられます。

(企画調整部 中村 一郎)



受講生によるデジタル撮影実習